

## 「亡き母の思い出」——イクバルのウルドゥー詩 (10) ——

松村 耕光\* 訳

### はじめに

本稿は、ムハンマド・イクバル (Muhammad Iqbal 1877-1938) の、ウルドゥー語で書かれた有名なマルスィヤ (marthiyah 哀悼詩)、「亡き母の思い出 (Wālidah-e marḥūmah kī yād mēn)」の翻訳である。

本詩は、1914年11月9日、イクバルの母イマーム・ビービー (Imām Bībī) が78歳で、イクバルの生まれ故郷シアルコート (Siyālkōt, Sialkot) で死去した際に詠まれ、後に、イクバルのウルドゥー第1詩集『鈴の音 (Bāng-e Darā 1924年)』に収録された<sup>1)</sup>。

母の死という哀しみを思弁によって乗り越えようとするイクバルの心理が如実に表れた本詩には、人間の本性 (jauhar-e insān) は不滅であり、死後も別の世界で活動を続ける、というイクバルの死生観が詩的に表現されている。マルスィヤの側面と哲学詩的側面とを併せ持つ特異な作品とすることができるであろう<sup>2)</sup>。

---

\* 大阪大学大学院言語文化研究科教授

- 1) 詩集収録時に、詩句の削除・追加や構成の変更が行われたということである (Rafī‘uddīn Hāshimī, *Iqbal kī Tavīl Naẓmēn: Fikrī aur Fannī Muqāla‘ah*, Lahore, 1985, p.87)。
- 2) 人間の本性を巡る問題は、ペルシア語の哲学詩「自我の秘密 (*Asrār-e Khwudī* 1915年)」と「滅私の秘儀 (*Rumūz-e bē-Khwudī* 1918年)」の中で詳しく検討されている。また、講演集 *Six Lectures on The Reconstruction of Religious Thought in Islam*, Lahore, 1930 (1934年にロンドンで再版される際、講演が一つ追加され、題名が *The Reconstruction of Religious Thought in Islam* と変更された) に収録された “The Human Ego: His Freedom and Immortality” と題する講演においても、イクバルは人間の本性について詳しく考察している。

## 亡き母の思い出

万物は運命に束縛されている

自由意志とは束縛を覆い隠す布である

天は束縛され、太陽も月も束縛されている

煌めく星々は運行を余儀なくされている

花園の蕾の壺は割れる運命にあり

花園の草花は成長することを運命づけられている

鶯の歌声であれ、心の声なき声であれ

すべてのものは世界を繋ぐこの鎖に繋がれている

運命の束縛の秘密が明らかとなれば

心に生じた涙の洪水は取まってしまう

心から喜び悲しみの踊りが消え

歌は残るが、音の高低の味わいは消え失せる

知識は涙と溜息とを奪う盗賊である

目覚めた心は金剛石である

私の庭に夜露の潤いはない

しかし私の目は紅の涙を流してはいない

私は人間の不幸の秘密を知っている

だから私の心の楽器は悲嘆の音を出したりはしない

私の口は世界の無常を語ったりはしない

私の心は驚かず、笑わず、嘆かない

しかし、母上を思い出すと、とめどなく涙が流れ出る

ああ、母上を思い出すと、私の確固たる思想は瓦解してしまう

溢れ出る涙によって心は安らぎを得ることができる

悲嘆することの大切さを知って冷静な理性は恥じ入ってしまう

湧き出る溜息の煙によって私の鏡は輝いている<sup>3)</sup>

私の裾には数多くの宝物が流れ着いている<sup>4)</sup>

母上を思い出すと、驚くべき奇跡が起こった

時の運行の向きが一変したのである

過去と現在とが並んだかのようで

私は幼かったときのことを思い出した——

母上の膝で弱々しい命が育まれていたときのことを

まだよく言葉を知らなかったときのことを

3) 「鏡」 心の鏡。溜息を悲嘆の焰に焼かれる心から湧き出る煙と見做している。

4) 「宝物」 涙のこと。

今やその幼子はその素晴らしい詩によって名声を得  
その目から流れ出る真珠はとても貴重なものとされている

学識に満ちた言葉を話していても、老熟の境地に達していても  
赫々たる名声を博していても、若く血気盛んであっても  
私たちは高みから降り  
母の側では無邪気な子供に戻ってしまう  
屈託なく笑い、何も心配せずに  
再びあの失われた楽園に憩うのである

誰が故郷で私を待っていてくれるであろうか  
私の便りが来ないと誰が心配してくれるであろうか  
母上の墓に行き、私はこう嘆くであろう——  
深夜の祈りの際、母上以外の誰が私を思い出してくれるであろうかと  
母上の薫陶のおかげで私の運命は星と同じとなった  
私は一族に誉れをもたらした  
母上の人生は世界という書物の黄金の紙面であった  
母上の人生は私に現世来世について教えてくれた  
生涯、母上は私に愛情を注いでくださった  
母上に尽くせるようになると、母上はいなくなってしまう  
糸杉のように背の高いあの若者は<sup>5)</sup>  
私よりも母上に尽くすことができた  
その若者は私の人生の同伴者であり  
母上の愛を思い起こさせてくれる、私の片腕である  
その若者は母上を思って子供のように泣いている  
朝夕、我慢できずに泣いている  
母上は私たちの心の畑に愛の種を蒔かれたが  
共に悲しむことによって私たちの愛は一層確固たるものとなった

ああ、この世界——老いも若きも悲しみに暮れるこの<sup>せかい</sup>館  
人は昨日明日という時間の何たる魔術にたぶらかされていることであろうか  
何と生きるのは難しいのであろうか、何と死ぬのは簡単なのであろうか  
命の花園では死はそよ風のようにありふれたものである  
地震があり、雷が落ち、飢饉があり、災害が起こる  
この世は何とひどい娘たちを持っていることであろうか  
死は貧しい者の小屋にも、富める者の屋敷にも訪れる  
荒野にも町にも、花園にも砂漠にも  
死は波静かな大海にも騒ぎを起こし

5) イクバルの兄シャイフ・アター・ムハンマド(Shaikh 'Atā Muhammad 1860年生まれ)を指す。イクバルには兄が一人、姉が二人、妹が二人いた(兄がもう一人いたが、幼くして死亡した)。

舟は波の懐に沈んでしまう  
不平は無力、言葉も無力  
命とは何であろうか——首を締め付ける枷である  
隊商には鈴の嘆き以外には何もない<sup>6)</sup>  
隊商の積み荷は濡れた眼<sup>まなこ</sup>だけである

しかし試練の時は終わる  
天の九層の帳の裏にはことは異なる時間が流れている  
構わないではないか——この花園のチューリップや薔薇の胸が裂けていても<sup>7)</sup>  
夜鶯<sup>フルフル</sup>が悲嘆に暮れなければならないとしても<sup>8)</sup>  
茂みは秋の溜息を鳥籠<sup>むね</sup>に秘めているが<sup>9)</sup>  
永遠の春風はそのような茂みを緑に変える  
構わないではないか——自分の火花が道に舞う土埃に潜んでいても<sup>10)</sup>  
この一握りの土が自分のかりそめの乗り物であるとしても  
命の火は灰だけを残して消えたりはしない  
それは壊れるのを運命づけられた真珠などではないのである

天の目に命はこの上なく麗しく見えるので  
天は万物に自己保存の本能を与えた  
もし死によって命の痕跡<sup>しるし</sup>が消えるのであれば  
宇宙の秩序は死を広めはしなかったであろう  
死はありふれたものであるから、たいしたものではない  
睡眠は命を損なうことはない  
ああ、愚か者よ、死の秘密はおまえが思っているようなことではない  
命の痕跡<sup>しるし</sup>の儂さが示すのは別のことである  
水面に生じる風の痕跡<sup>しるし</sup>は見ていて心地よい  
ざわめく波を砕いて風は泡を作り出す  
そして風は再び波の中に泡を隠し  
無慈悲にも自分の痕跡<sup>しるし</sup>を消し去ってしまう  
再度泡を作り出せないのであれば  
風は無造作に泡を壊したりはしないであろう  
この振舞は泡の生成には何ら影響を与えない<sup>11)</sup>  
このことは風に泡を作り続ける力があることの証明である  
存在<sup>せかい</sup>は理想探求の虜となっているのかもしれぬ  
それはより良い姿を追い求めているのかもしれぬ

6) 「鈴」 隊商の駱駝の首に付けられた鈴のこと。

7) 花卉の重なりを悲嘆のために裂けた胸に見立てている。

8) 夜鶯 (bulbul) は恋に苦しむ求愛者の象徴。

9) 秋の溜息を秘めた茂みとは、秋になって枯れた草のこと。

10) 「道に舞う土埃」 土は物質的な身体を意味している。

11) 「この振舞」 作った泡を自ら壊すという風の振舞。

ああ、煌めく水銀、天を輝かせる星々——<sup>12)</sup>

これらの火花が美しいのは夜だからである  
星が輝いてきた時間の長さに理性は首を垂れる他はない  
人類の時間など一瞬である  
しかし人間の目は天のはるか彼方を見遣っている  
人間は天使よりも純粋に目的を追い求めている  
人間は宇宙の宴で明るく輝く蠟燭である  
天空すら人間の広大な本性に比べれば一つの点であるに過ぎない  
真実を求めて人間の無知は打ち震えている  
その爪は宇宙の楽器を掻き鳴らす撥である  
この焰は天の火花に劣るであろうか<sup>13)</sup>  
その太陽は星に劣るであろうか

薔薇の種子は地中でも眠らない  
種子は成長を切望しているのである  
種子に潜んでいる命の焰は  
外に出ずにはいられない  
命の焰は冷たい墓の中でも消えることはなく  
土に埋められても熱をなくさない  
命の焰は花となって墓の中から顔を出す  
それは言わば死から命の衣を獲得するのである  
四散した力は墓の中で一つとなり  
天の首に縄をかけるのである<sup>14)</sup>  
死とは命の味を新しくすること  
眠りの中には覚醒の知らせが秘められている  
飛ぶことに慣れている者は飛ぶことを恐れない  
この花園では死とは飛ぶ準備をすることである

人は言う——死の悲しみに薬なしと  
別離の傷は時間という薬によって癒されると  
死別の悲しみが住み着いた心——  
それは朝夕の循環とは無縁である<sup>15)</sup>  
時間の力によっても悲嘆の声は収まらず  
時間は別離の刃が与えた傷を癒せない  
急に不幸に襲われると

---

12) 「煌めく水銀」 星の輝きを振るえ、煌めく水銀に警えている。

13) 「天の火花」 輝く星のこと。

14) 天に届くほど成長するということ。

15) 死を悼む心は時間によっても癒されないということ。

目からとめどなく涙が流れ出る  
心は悲嘆に取りつかれ  
心の血が涙とともに流れ出る  
人は忍耐力を持ち合わせてはいないが  
不思議な感覚を持っている——  
人の本性は無くならぬ  
見えなくはなるが、消えたりはしないという感覚である  
悲嘆の焰によって命の衣は灰にされてしまうが<sup>16)</sup>  
この不思議な感覚の水はその焰を消してくれる  
ああ、悲嘆の声を上げないのは無知のせいではない  
この感覚が心を慰めてくれたのである——悲しみを忘れたからではない

東の帳の内から朝が現れ  
夜の汚れを天の裾から流し去る  
朝は色褪せたチューリップに焰の衣を纏わせ  
無言であった鳥に歌を歌わせる  
フルフル  
夜鶯の胸の牢獄から歌が解き放たれ  
朝の風は多くの歌で満ち満ちる  
チューリップの園や山や川で眠っていた者たちは  
命の花嫁と巡り合う  
夜が朝になるのが存在の法則であるならば  
墓の夜が朝にならないことがあるであろうか

想像力の銀糸の網は天を覆い<sup>17)</sup>  
母上の思い出を捕まえた  
悲しむ心は母上の思い出で満ちている  
カアバが祈りの声で満ちているように  
命と呼ばれる義務の連鎖は  
儂いいくつもの世界に現れる  
せかい  
存在の各段階の慣行は異なっているが  
しきたり  
来世もまた命の活動の舞台である  
来世は死の畑には適さぬが<sup>18)</sup>  
行動の種子には適した場所である  
本性の光は肉体の暗黒に囚われてはいない  
人間の思考の到達範囲は限定されてはいない  
母上の人生は月よりも輝いていた  
母上の旅は朝の星よりも素晴らしいものであった

16) 悲しみが生きる気力を奪うということ。

17) 「想像力の銀糸の網」 素晴らしい想像力、といったほどの意味。

18) 来世は死と無縁ということ。

私は願う——朝の大広間のように母上の墓所が輝くことを  
母上の土の寝所が光に満ち溢れることを  
天が母上の墓に露を散らすことを  
若草が母上の家を見守ることを